「曲想と音楽の構造との関わりに気付き、
生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わったりするために」
第２学年　～　表現領域　「跳んで 跳んで かえるのさんぽ」　～

１　はじめに

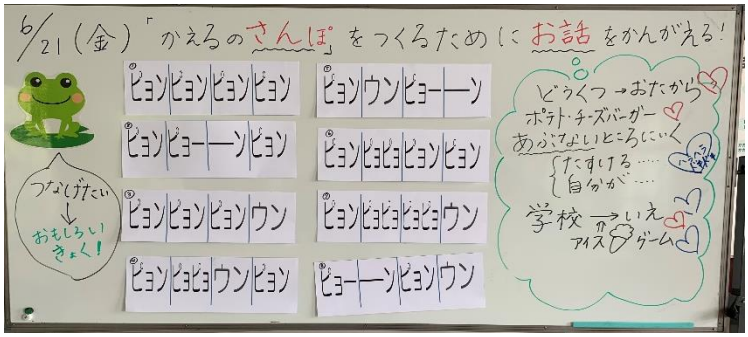
本題材は、表現に対する思いをもって、リズムを組み合わせることがねらいです。「かえる」や「さんぽ」のように子どもたちの身の周りの事象を条件として取り上げることで、これまでの音楽経験に関係なく、表現に対する思いをもって、学習に取り組むことができるのでは、と考えます。しかし、これまで子どもたちは主に曲想を視点に表現や鑑賞の学習を取り組んできたため、音楽を形づくっている要素を用いて思いをもって表現することは難しいと感じ、以下のような支援を考え、実践しました。

○　子どもが考えたリズムや、音楽の構造を視覚化する。そうすることで、表現に対する思いに合ったリズムを見つけたり、組み合わせたりすることができるようにする。
○　音楽の構造を用いて表現を工夫している子どもを紹介したり、価値付けたりする。そうすることで、自分の表現に対する思いに合った表現の工夫に気付くことができるようにする。
○　音楽の構造を視点に、つくったリズムを友達と伝え合う場を設定する。そうすることで、音楽の構造を用いて、自分の思いを表現する楽しさに気付くことができるようにする。

２　子どもの学びについて

かえるになりきってジャンプ！～擬態語の表し方～

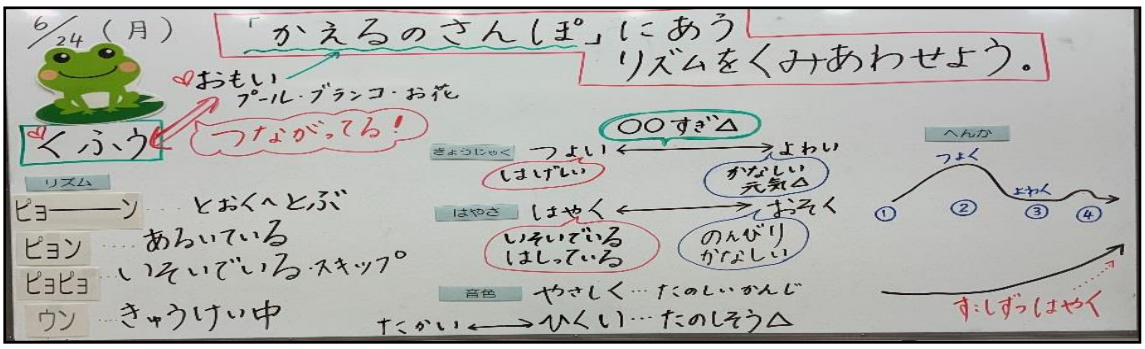
かえるになりきってジャンプをする子ども達は、自然と自分の跳び方に合わせて、「ピョン」や「ピョーン」「ピョピョ」とリズムをつくってリズムで遊んでいる様子が見られました。低学年の子どもたちは、身体表現が大好きであり、特に何かになりきって表現することに抵抗がありません。そのため、「かえるのさんぽ」というテーマを提示した際、子どもたちは公園に行くストーリーや冒険のストーリーなどを進んで考え、リズムを組み合わせようとすることができました。



しかし、「ピョン」という擬態語では、「かえるのさんぽ」というテーマに沿った音楽づくりに限界がありました。“さんぽ”というテーマを提示するのであれば、それにしたがった擬態語を用いたり、もしくは、「ピョン」ではなく「ゲロゲロ」や「ケロケロ」といった鳴き声を用いたりして、音楽づくりを行っていく必要があったと考えます。

感じたことを友達に伝えよう～言語化と音楽的感受性の両立について～

自分の授業映像を分析すると、子どもが演奏・つくった音について、「どう感じた？」「どう思う？」と、感じたことや気付いたことを言語化したがる傾向があると気づきました。



低学年の子どもたちは、「なんとなく、この音が好きだな。」と、自分の身の回りの音や音楽に多く触れることによって、音楽的感受性を養う大切な時期だなと、今年度２年生を担任して、改めて感じました。「好きだな。」「いいな。」と思った音や音楽を無理やり言語化させることによって、「なんとなく」音や音楽を好きになり始めた子どもの意欲を低下させてしまうと考えます。

これまでは、自分が感じ取ったことや聴き取ったことを言語化することは、他者とより深くかかわっていくためには必要だと考えていました。しかし、音や音楽は、言葉に言い表すことができない部分があるからこそ、音や音楽で表現されていると考えました。さらに、音や音楽の良さに関して低学年の子どもたちの言葉では伝え切れなかったりするという課題があると感じました。うまく自分の思いが言語化できないと、「音楽って楽しくないな。面白くないな。」と子どもの意欲を損なってしまいます。そうならないためにも、子どもが演奏したり、つくったりした音や音楽を認め、高め合うことができる授業をつくっていきたいと思います。音や音楽を聴き、「どうしてその音や音楽がいいなと思ったの？」と理由や根拠等を言語化するよりも、「その音、とってもすてきだね。」と音や音楽に存分に親しむことを重点的に行っていきたいと考えます。子どもたちが、「なんとなく」から核心に迫ることができるように、低学年の音楽科の授業の間に、たくさんの音や音楽に触れ、「なんとなく好きだな。いい音だな。」と思う場を多く設定していきたいなと、今回の実践を通して考えます。

３　おわりに

新学習指導要領では、音楽の感性を働かせながら、他者と協働することが求められています。この音楽的な見方・考え方をより働かせることができるように、一人で音や音楽に向き合うことも大切ですが、その音や音楽、音楽表現のよさについて見出せるように授業改善を図っていきたいと考えます。